

吹田順助

すいたじゅんすけ

初期の「心の花」は信綱の方針で広く文芸に門戸を開き、鴉外、敏、楠緒子、廣子等により海外文學の重要な発信地の一つともなった。独文学者の祖父は学生時代より翻訳を始め、「失望」という短編でまだ日本では無名だったマンの初出もしている。「心の花」にも自作の小説等の他、アンドレーエフの笑、ポタペンコの羞恥、ガルシンの果敢ない戀、トフォオテの沈黙、シュニッツレルのアンドレアス・タマイヤアの遺書。ヘッペルの恐怖、初戀、ユウデイツトを載せている。これらの内ロシア物は独語からの重訳で殆ど初出。以降ヘッペルのユウデイツト、ミケランジェロ、マリアマクダレーネ、ギイゲスと彼の指環、ゲノフェーフア。クライストのペンテジレーア。ヘルデルリン、ゲーテ、ハイネ、ブランドス等の訳の他、独逸思潮史、独逸文學に関する著も多い。ウエッセルブルーレンのヘッペル博物館に祖父のブースがあったが今もあるだろうか。絵

峰尾碧

にかいた様な江戸っ子で親友が多く、特に開成中学から東大までの友人達とは影響を与え合い生涯篤い親交を結んだ。ドイツ文學者の小牧健夫、成瀬無極、上村清延：挙げきれないが彼らが本当にお互いを好きで敬意を払っているのを美しいと思った。札幌農大の同僚有島武郎と親密で浄月庵跡に祖父の詩の碑があった。

大きな可能性、エラン・ヴィタル、社会の心臓——そういう君は死んじゃった！
もろくも死んじゃった！

運命の奴め！すごい事をしやがったな！
有島は小説に専念するよう強く勧めていた。祖父の小説の中では精神に異常をきたした与力の次第に昂揚していく脳髓と皿の上の震える牡蠣が重なり合って見えて来る「牡蠣」がいいと思う。漱石の講義は絶大な人気でハムレットの饗宴の場など「どんぶり鉢や浮いた、浮いたと、みんな夢中になつて騒いでいる処へ」というような酒脱

さだったそう。「心の花」を紹介してくれた信綱の親戚の村岡典嗣は日本思想史の碩学で中学からの親友。従兄の上田敏の影響は大きい。川田順は一級上、茂吉は同級で少年時より同学。川田順は風采閑雅、堂々として華があった。茂吉とは吉井勇と痛飲したり独留学時代もよく会い、祖父は理解と敬意に満ちた評文を多く書いている。留学行の祖父の船と帰国中の新村出博士の船がすれ違う時電報を打ちあって愉しそう。文壇酒豪番付で東の大関、晩年まで毎晩一升位呑み、談論風発、回つてくると見事な歌舞伎の見得を切り、それは愉しかった。毎晩呑み歩きよく人が来て酒盛りをした。

晩年は親友達が逝き高橋義孝等少壮気鋭の人ばかり。内田百閒に会つた覚えがある。ひとしきり呑むと彼らを送つて行つて又外で呑む。遅く帰つてきて深更まで何か書いている。どんなに呑んでも翌朝の講義に遅刻しなかつた。色々な所へ連れて行つてくれた。お葬式の日、どなたか立派な学者があなたのお祖父さんは聖なる酒呑みだった。あなたも聖なる酒呑みにおなりなさいと十四歳の私に言つて下さつた。長じて相当品下れる酒飲みになつた私はこの言葉を思い出して屢々愧じ入るのであった。